

書 評

橋本武 PHP文庫

『伝説の灘校国語教師の「学問のすすめ」』

2015年3月17日 第1版第1刷

今 泉 忠 淳*

著者の橋本武氏は、長く兵庫県の灘高校の国語教師を務めた方である。橋本氏の国語の授業は、「三年間をかけて二百頁あまりの一冊の文庫本『銀の匙』（中勘助著）を読む」という異色のものであった。何故、橋本氏はそのような授業を行うことにしたのか。

橋本氏は、灘高校に来て数年が経ったとき、「いくら一所懸命教えても生徒の記憶には残らず、卒業したら全部忘れてしまうような授業を毎日するなんて、なんてむなしいことだろう」と思ったという。そして、「卒業してからも、社会人になってからも、生徒が思い出し、人生の役に立つようなことを教えたい。生徒の心に生涯残り、生きる糧となる授業をするにはどうしたらいいのだろうか」と思案した。そして、編み出したのが、『銀の匙』を三年間かけて一字一句を丁寧に読み解き、細部にいたるまで心を配って調べつくす、という授業方法である。

橋本氏は、『銀の匙』の授業の中で、徹底的に調べることを、楽しくすること、横道にそれること、日々の積み重ねをすること、書くこと、基礎力を養うこと、出会い・縁を大切にすること、などを実践してきたという。

ところで、学生時代には町医者を目指していた私だが、期せずして大学生に講義をする立場になり、試行錯誤を繰り返しながら講義に臨んでいる。しかし、教育についてはずぶの素人であり、戸惑うことも少なくなく、stray sheep状態である。30年前に自分自身が大学生であったころのことといえば、部活動のことやコンパのことなどは思い出すのだが、講義の中身については覚えていることは少ない。

自分が学生のころには無かったが、最近では、「学生による授業評価」が必ず行われている。その評価を参考に、毎年の講義をブラッシュアップして、よりよい講義にしようと努めている。しかし、「学生による授業評価」の結果を見ると、私の意図していることや、訴えたいと思っていること、また、講義に対する熱意などは、必ずしも伝わっていないようである。学生の見方・評価には効率重視の「近視眼的」なものも感じられ、必ずしも肯定できるものばかりでもない。ここに、教員と学生との間のすれ違いが存在するようである。

「学生に30年後に思い出してもらえようような講義」とはどんな講義であろうか？医学の知識は日進月歩であり、今日講義で習った事が明日には書き換えられるということもありうるし、また、30年後に書き換えられていなかったとしたら、それは医学の進歩が止まってしまったということを意味するであろう。とすれば、単にestablishされた事実を詰め込むのではなく、先輩として日々変化して行く医学・医療に対して必要な根本的な物の見方・考え方を伝えることができたらいいいのではないだろうか。しかし、それは、「言うは易し行うは難し」である。

本書を読み、橋本氏の思想に触れることによって、日々の教育活動の在り方に一つの指針を与えられたように感じた。本書は、灘高校という特殊な学校において実践された教育の記録と、それに付随した

*弘前大学大学院医学研究科
Hirosaki University Graduate School of Medicine

「人生論」であるが、「学ぶことが面白く生きること」につながる、という普遍的な事実に集約されている。弘前大学という場での教員・学生にとっても大いに参考になると思う。